

「頭がいいけど『世間』に弱い」理系の大学生

特別講座 桑子敏雄×上田紀行×池上彰

5月10日木曜、関東地方を突風と豪雨が襲う中、東京・目黒にある東京工業大学で、同学のリベラルアーツセンター設置記念講演「現代における“教養”とは」が開催されました。リベラルアーツ、すなわち教養をテーマに語るのは、センター長の桑子敏雄教授、上田紀行教授、そして、池上彰教授です。池上教授のコーディネートで、さあ「教養のススメ」を、どうぞ。（まとめ 片瀬 京子）

池上：今日は突風と雨にもかかわらず、たくさんの方にお集まりいただきまして、と言いたいところですが、天候のせいでちょっと出足が悪いようですね（笑）。改めまして、お越し下さってありがとうございます。この模様はニコニコ生放送でも中継されています。後ほどお答えする時間を設けていますから、ぜひ、ニコ生をご覧の皆さん、質問をお寄せください。

さてこのリベラルアーツセンターは、私たち3人だけの小さな所帯でスタートしました。日々、いろいろな仕事を押しつけ合っています（笑）。お2人に学問ではまったく及びませんので、せめて司会役は、というわけで、私が進行役を務めます。「現代における“教養”とは」を、ぜひみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

では、センター長の桑子先生、第一声をどうぞ。



桑子 敏雄（くわこ・としお）

哲学者。東京工業大学大学院教授、同リベラルアーツセンター長。博士（文学）。1951年群馬県生まれ、75年東京大学文学部哲学科卒業、同大学院人文科学研究科哲学専修課程、博士課程修了。南山大学助教授などを経て東工大へ。2012年4月よりリベラルアーツセンターを率い、東工大生の「教養」力向上に務める。著書に『西行の風景』『感性の哲学』（日本放送出版協会）、『[風景のなかの環境哲学](#)』（東京大学出版会）、『[空間の履歴](#)』（東信堂）など多数。（写真：丸毛 透、以下同）

桑子：リベラルアーツセンター長の桑子です。リベラルアーツセンターは2011年1月に設置し、準備を重ねて来ました。このたび、池上先生、上田先生に着任いただき、この4月から本格的に始動し、東工大の学生たちに文系の学問を教えています。

このセンターの役割の2つあります。1つは、東工大の学生たちに文系科目を提供すること。もう1つは、これからの「教養教育」とはどうあるべきかを考えることです。理工系学生の持つべき教養とは何か、そしてもっと広く、これから社会を背負っていく、若い人たちにとっての教養とは何かについても、どんどん提案をしていきたいと思っています。

池上：次に、東工大の伊賀健一学長からの挨拶をお聞きしましょう。持ち時間は3分間です。さきほど学長は、時間は守るとおっしゃっていましたが、さて、どうでしょうか（笑）。学長、お願いいたします。

教養とは、羊の群れに混じったわがままなヤギである

伊賀：ようこそ、リベラルアーツセンターへ。リベラル=自由ということで、私の挨拶の時間も、少しリベラルに延びるかもしれません（笑）。



伊賀 健一（いが・けんいち）

東京工業大学長。工学博士。63年東工大卒、同大学院博士修了、68年精密工学研究所助手、73年同助教授、84年同教授、95年同所長、01年日本学術振興会理事。2007年より現職。面発光レーザーの発明と微小光学の研究。紫綬褒章、朝日賞、藤原賞、IEEEダニエル E. ノーブル賞、ランク賞、C&C賞、NHK放送文化賞ほか。趣味はコントラバス。

かつて東工大には和田小六という学長がいました。その和田さんは、戦後まもなく、大学教育を一変させる改革を行いました。今でもそうですが、日本の大学の多くでは1、2年生で教養課程を学び、3、4年生で専門課程を学びます。でも、和田さんは教養課程と専門課程を4年間混ぜました。1年生でも専門を学ぶし、4年生でも教養を学ぶ、というカリキュラムにしたのです。学年が上がるごとに教養科目を減らし、専門科目を増やすといういわゆる「くさび型」教育です。

あまりに斬新すぎる仕組みで、一時期はトーンダウンしましたが、現在、日本の大学教育では、この和田さんの方式を取り入れる方向に進んでいます。東工大は、新しい教養教育のかたちを先駆けて採用していたと言えます。

もともと、東工大は「教養」については名教授が何人もおりました。私が東工大の学生だった頃の教授陣にも、永井道雄（教育社会学者）、KJ法の始祖である川喜田二郎（社会人類学者）、宮城音弥（心理学者）、江藤淳（文学者）といった方々がいて、教養を重視してきた学校であったと思っています。

さて、教養とはなんでしょう。

私は、教養とは知識と本質である、と考えています。

伊賀：数年前にヨルダンを訪れました。山を見ると、山沿いにまっすぐな線が入っているように見えます。これは羊が草を食べた跡です。羊はまっすぐに前の羊に従って歩くので、だんだんと草がなくなって、後から来る羊は草がなくなり痩せてしまいます。この羊の集団に山羊を少し入れるのだそうです。山羊というのはいい加減で、ふらふらとランダムに草を食べて歩きますから、羊まで一緒になって、草をいろんなところに食べに行くようになります。すると一直線に食べ尽くしてしまうということがない、つまり、異質な山羊という存在を加えることは、羊という集団にとっていいことなんですね。以上はいまのヨルダンに関する知識です。

ヨルダンという国は、中東にあります。石油が出るわけではありません。有名なのはモーゼの遺跡、南端にあるペトラ遺跡、死海でしょうか。1900年代の初めに、オスマン帝国の統治からアラブ諸国が独立したのですが、同時にイスラエルも作られました。それから百年が経過したわけで、歴史、地理、宗教をよく知らないと、今起きていることの本質が見えてこないものです。学生諸君には、知識を得ると同時に、ことの本質を理解して欲しい。その思いもあって、このセンターの準備に取り組んできました。大いに期待をしています。みなさんも、どうか応援をよろしく願いいたします。

池上：伊賀学長、ありがとうございます。理工系大学の学長がヨルダンの羊について語る。これがまさに「教養」です。そして、東工大における我々リベラルアーツの教官は、羊の群れにまざった異質な山羊である、ということがわかりました（笑）。

ではさっそく3人の山羊、登場です。実は昨日、顔合わせはしましたが、打ち合わせはしていません。ぶっつけ本番です。まずセンター長の桑子教授に、そもそもリベラルアーツセンターとは、について伺いましょう。

文部省が「大学に教養教育は不要」と言い出した

桑子：私は以前、南山大学の文学部で哲学を教えていました。東工大に来たのは1989年。工学部の助教授として赴任しました。工学部の中に人文社会群があったのです。東工大の人文社会には、素晴らしい先生がたくさんい

ましたから、そういうところへ加われるのだと、興奮をしたことを覚えています。文芸評論家でもある江藤淳先生とも、2年間ご一緒しました。

前任の南山大学文学部では、文献を用いて主に西洋哲学を教えていましたが、東工大で理系の学生に教えるとなると、勝手が違う。さて、どうすればいいか悩みました。そこで一から「哲学とは何か?」「哲学的な思考法とは何か?」というところから教えることにしたのです。

ところが赴任して2年が経た頃に、当時の文部省の大学審議会が、「大学に教養教育は要らないのではないかとむしろ専門教育や大学院を重点化すべきではないか」という方針を打ち出したのです。

桑子：実際にどうするかは各大学に一任されていましたが。東工大では、学部の教養教育を解体することになり、そのかわりに、新しい大学院を設置しました。私は社会理工学研究科という大学院に所属した上で、学部教育も担当することになりました。

このように90年代初頭、日本の大学では、教養教育、とりわけ文系学問の教養教育がものすごく軽んじられていたのです。

その状況が一変したのは、1995年です。1995年には阪神淡路大震災がありました。そのあとに、オウム真理教による地下鉄サリン事件が起こりました。

オウム事件でわかった。日本の理系には教養が足りない！

池上：ああ、そうか！ オウム真理教は、幹部に理科系出身者が数多くいたことが問題視されましたね。日本の大学の理系教育は専門課程の純粋培養が過ぎて、教養や世間知を学生に教えていないのではないかと。だから、オウムのようなカルトによりにもよって科学の徒が妄信してしまうのではないかと。

桑子：もっとも、すぐに文系の教養教育を理系の学生に再び施そう、とはならなかったのですが、しかし、若い人たちの人間性、社会性を育めるような大学教育のあり方が問われたのは確かです。もう一度教養教育を見直そうという動きが大学の中で起きました。

さて、学長の話にもありましたが、東工大では伝統的に学部の1年生から大学院生まで、ずっと教養教育を受ける機会を設けています。これを「くさび形教育」と呼んでいます。



池上 彰（いけがみ・あきら）

ジャーナリスト1950年生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業後、NHK入局。科学文化部記者として経験を積んだ後、報道局記者主幹に。94年4月から11年間「週刊こどもニュース」のお父さん役として、様々なニュースを解説して人気に。2005年3月NHKを退局、フリージャーナリストとして、テレビ、新聞、雑誌、書籍など幅広いメディアで活躍中。2012年4月より、東京工業大学大リベラルアーツセンター教授として東工大生に「教養」を教えます。主な著書に『[伝える力](#)』（PHPビジネス新書）、『[知らないと恥をかく世界の大問題](#)』（角川SSC新書）、『[そうだったのか！現代史](#)』（集英社）など多数。（写真：丸毛 透、以下同）

池上：くさび形教育とは、と、私の悪い癖で解説をいたします（笑）。私自身、先日、新任教員採用研修で習ったばかりの話ですが。東工大では一年生のころから教養課程と専門科目の両方を学びますが、専門科目が学年が上がるにつれて増えていって、次第に教養から専門へと移っていく。図式化すると、一年生にむかって専門科目のくさびを打ち込んだようなかたちのカリキュラムになる。つまり、1年から専門科目を習うし、大学院でも教養課程を学ぶ。ただし、その比重が違う。これが東工大の伝統的な教育方法です。

桑子：まさにその通りで、東工大では教養教育の場はもともとあったし、相対的に重視もされていたのですが、一方で大学院教育の重点化が進んでいたこともあって、あまり目立っていませんでした。そこで、改めて東工大の伝統である教養教育の存在を示すためにも、制度面、組織面でも新しい拠点を作ろうじゃないか、という機運が巻き起こりました。それが、このリベラルアーツセンターです。教授は、私、池上先生、そして上田先生の3人ですが、今後充実させて東工大での教養教育だけでなく、日本における理工系学生の社会教養教育の一端を担っていきたいと考えています。

池上：ありがとうございます。ではこのリベラルアーツセンターで文化人類学を教える上田先生にご登場いただきましょう。

上田：96年に東工大で教えないか、と声をかけていただいたときには驚きました。さきほどのKJ法の川喜田教授から数えて3代あとの文化人類学者として東工大へ呼んでいただいたことになるのですが、当時の私が専門に研究していたのは「スリランカの悪魔祓い」と「癒やし」です。東工大には悪魔でもいるのか、そんなに癒やされていないのか、と思ったものです（笑）。



上田 紀行（うえだ・のりゆき）

文化人類学者。1958年生まれ。東京大学教養学部文化人類学科卒業、同大学院博士課程修了。愛媛大学助教授を経て東工大へ。「癒し」という言葉を日本に広め、日本社会の閉塞性の打破を、新聞、テレビ等でも説く。近年は沈滞する日本仏教の再生運動にも関わり、ダライ・ラマとの対談も出版。東工大では学生からの授業評価が全学1位となり、東工大教育賞最優秀賞を受賞。著書『[生きる意味](#)』（岩波新書）は2006年度大学入試出題数第1位の著作となる。その他、『[生きる覚悟](#)』（角川SSC新書）、『[「肩の荷」をおろして生きる](#)』（PHP新書）、『[ダライ・ラマとの対話](#)』（講談社文庫）など著書多数。

「教養とは何か」というのが本日のテーマですが、「教養」という言葉自体が昔ほどは使われない、もしかすると減びつつある言葉の一つかもしれません。

でもね、いまでも「教養」って言葉は死んでいないんです。たとえばですよ、「あなたって教養のない人ね」と言われたら、それはもうドッキーンとします（笑）。

池上：おや、上田先生、かつて女性に「教養がない人ね」と言われたことがあるんですか（笑）？

上田：いや、あのですね、このフレーズは、あくまで女性が男性に使う言い回しです。だってもし、女性に対して男性が「きみは教養がないねえ」なんて言ったら、その瞬間にもうお終いですよ（笑）。

さて、いずれにせよ「教養がないね」という言い回しに人がショックを受けるのはなぜでしょう？

「英語ができないね」「数学ができないのね」は、単に英語の能力、数学の能力、という個別具体的な科目の能力がないだけなので「英語はできなくても数学はできる」「数学はできなくても英語はできる」のならば、言われた当人もさうさう堪えることもないでしょう。

でも、「教養がない」と言うのは、相手に対する人格否定、全否定です。つまり、「教養」というのはその人自身の人格にかかわってくる。

また、「彼は仕事ができるけど、勉強ができるけど、教養がないね」という言い方もありますね。その一方で「教養が邪魔をして」という言い方もあります。つまり教養というのは、「かしこい」「おバカ」にも関係している、それも、単にある分野についてかしこいかさうでないか、ではなく、そのひとの全人格的なものを背負った上での「かしこい」「おバカ」にかかわるもの、それが「教養」なんです。

大正・昭和の教養主義は、大学庶民化で消え去った

池上：日本で教養が重視されるようになったきっかけは何でしょう？

上田：教養が日本で重視されるようになったのは、かつて「大正教養主義」と言われていた時代、大正時代に入ってからでしょうね。東京帝大などの旧帝国大学では、「おりこう」になるための専門能力を身につけることが重視されていましたが、帝大に入る前の旧制高校では、ゲーテを読んだりカントを読んだりして、学生は、理系文系にかかわらず、徹底的に「教養」武装をしていたのです。

池上：デカンショという言葉がありますよね。デカルト、カント、ショーペンハウエル。旧制高校の象徴でした。

上田：ええ、そうです。戦前、そんな旧制高校生的デカンショ的教養を担った出版社が、岩波書店でした。それに対して、庶民型の“修養”を担ったのが、当時の大日本雄辯會、今の講談社です。

戦前、「教養」は高貴とされていたんですね。世俗的な、一般庶民の生活の知恵につながる「修養」を下に見ていました。また、戦前の教養主義は、東洋を見ずに、西洋を重視していました。大正教養主義も、昭和教養主義も同様です。その流れは戦後も続きましたね。「岩波文庫を何冊読んだか」が競われるような時代がありました。

池上：昭和20年代（1950年）生まれの私は、まさにそんな時代に中学高校を過ごしました。

上田：昭和30年代前半（1958年）生まれの私などは、昭和教養主義の最後の残映を知っている世代だと思います。

池上：でも、いまや、デカンショを必携の書とし、岩波文庫で教養を身につける、という教養主義は、高校はもちろん、大学からも消え去りました。いったいいつ、教養主義は消えてしまったんでしょう？

上田：私が考えるに、1970年代にこうした教養のあり方が崩壊します。説はいろいろありますが、私は、大学の庶民化があるだろう、と考えています。かつて大学はごく一部のエリートが通う場所でした。それが誰もが大学に通う時代になって、かつてのように大学生はエリートではなくなってきた。大学を出た人の大半がサラリーマンとして中産階級に属するようになりました。かくして、教養と修養を差別化する必然性がなくなったのです。

池上：戦前の岩波の教養主義と講談社の修養の実践との間に差がなくなってしまったんですね。

上田：そして80年代以降は、教養よりもはるかに重視されるものさしが現れます。「お金」です。端的に言ってしまうと、教養があって貧乏なのと、教養はなくてもお金持ちなのとどちらがいいか、どちらと結婚したいかと女性に問うと、やっぱりお金を選ぶ、という時代になっちゃったんですね。教養がなくてもお金持ち、というキャラクターのほうが圧倒的に人気をかちとる。社会を動かす要因が政治から経済になり、社会そのものが経済市場化していくようになり、以前からの古色蒼然とした「教養」は役に立たないものという烙印を押されてしまいました。

池上：時代でいうと、まさにバブル景気の前後ですね。さきほどの桑子先生、上田先生がおっしゃった、大学の脱・教養、専門重視もちょうど同じ時期から起き始めます。

上田：そうです。かつて教養を学生に施した大学も変わりました。教養主義は廃れ、専門化が進み、結果として「できる人間」「できて儲けられる人間」を育てる場になりました。この10年くらいは特にそうですね。

ところが、今、こうした大学の「専門」重視のカリキュラムが、実は根本的にダメなんじゃないか、と、いま問題となっているんです。

池上：なぜですか？

新しい時代は、「教養」こそがビジネスにつながる

上田：一見役に立たない「教養」を学ぶ時間をどんどん削って、専門科目だけを徹底的に習得させると、たしかに学生たちは「できる人間」になります。でも、この「できる人間」とは、あくまで「決められた枠組み」で「できる人間」のことなんですね。

価値観が多様化して、「枠組み」そのものをどう決めるかという時代には、実はこうした「決められた枠組み」の中だけで「できる人間」や「専門家」は、新しい時代には対応できない、新しいアイデアが出せない「使えないやつ」となってしまうのです。

池上：今までの「枠組みの中での専門知識」が、役に立たなくなった瞬間、そんな知識しか身につけていない人間も、役に立たなくなってしまう、というわけですか。

上田：日本では、大学どころか中学高校から「決められた枠組み」の中だけで勉強させるようになってきました。現在の高校生は入試科目しか勉強しません。かつての高校生が「学年で1番」を目指し理系科目も文系科目も数学も物理も地理も古文もぜんぶ学んでいたのとは違います。今は、大学入試に出ない問題なんかやってもしょうがない、効率が悪い、コストパフォーマンスが悪い、もっと言うと、試験に関係ない科目を勉強しても出世できない、金持ちになれない、というわけです。

これは、いまの受験そのものが抱えている本質的な問題でもあります。誰かが出した問いをエレガントに解くには、コストパフォーマンスを追究する勉強法で「解法」を勉強するだけでいいでしょう。東工大生も、「この条件で最適解を出しなさい」という問いを解くのはすごく得意です。

上田：けれども、「決められた枠組みで、決められた問題を、いかにエレガントに素早く解くか」という力だけでは、「いまの社会では何が問題か？」というように、問題そのものを自分で設定しその答えを自ら探していく、という状況には対応できないんですね。

問題設定そのものを自らしなければいけない、決められた解が存在しない典型的な課題が、原子力発電の問題です。これから原発をどうしていくのか。優先すべきは経済合理性なのか安全性なのか。原発の技術開発をどう考えていくのか、さまざまなオプションの中で何を決めていくか。理系の専門知識だけでも、文系の経済知識だけでも、解は出てきません。つまり既存の枠組みを一步も二歩も踏み出さなければ、対応できない。

じゃあ、そんな「解なき時代」に必要なものはなにか。それが「教養」です。既存の枠組みでは、役に立たないかもしれない。けれども、未来に必須の新しい思考体系をもたらしてくれるかもしれない。それが「教養」です。

現代においては、かつて、エリートがエリートさを見せつけていた時代の大正や昭和の教養主義の時代の教養とは別の、新しい教養が求められています。では新しい教養とは何か？ その問いに答えていくのがこれからのテーマです。

池上：上田先生、ありがとうございます。いま「教養」教育が必要である、ということが具体的にわかりました。

では、ここで私がリベラルアーツセンターに参加することになったきっかけについて、お話しいたします。昨年、東工大から突然声が掛かったときには、たまげました。小学生に向けてやさしくニュースを解説した男が、今度は大学生に話をするのかと（笑）。

お声がけいただいたあと、よく考えてみると、先ほどから名前が挙がっていますように、宮城音弥先生、江藤淳先生など、東工大には文系の立派な先生が数多く在籍していらっしゃいました。また、いただいたお題は、「理工系の東工大の学生たちに、文系的な常識、社会や政治や経済の常識やコミュニケーションをぜひ教えてほしい」ということでした。

そこで、はたと気づきました。そういえば、この東工大から近年総理大臣が出たなあ。しかもその総理大臣は、人を動かしたり、コミュニケーションをとったり、ということがとっても苦手だったなあ。

(会場爆笑)

理系にコミュニケーションを、文系に専門情報を

池上：というわけで、私に声が掛かったときに、もう、東工大からはそういった卒業生を出さないようにすべきだという判断があったのかなと、勝手に解釈をしているということです。

もうひとつ、私の役割は、「理系」と「文系」の垣根を取り去ることだと思っています。

昨年の東日本大震災とそれに伴う津波、東京電力福島原発事故のあとに、ウェブやメディアでは、理系出身者と文系出身者との間に情報の分断が起きてしまいました。理系のひとが当然のように使っている用語が、文系のひとにはちんぷんかんぷん、ということがたくさんあったのです。一方で、官邸に呼ばれた理系の専門家が、政治家たちに問題点を理解させることができず、まったく機能しなかった、ということもありました。

理系の人には、理系的な知識のない文系の人にも専門情報をわかってもらえるような説明やコミュニケーションの能力が必要ですし、一方の文系のひとにも確率などの数字や科学に関するリテラシーが必要です。

理系と文系がそれぞれの専門分野に閉じこもってしまう専門バカでは機能しない。まさに文理融合が個々人に求められる。私自身は、慶応義塾大学経済学部を出た文系の人間ですから、理工系の東工大の中に入って、なんらかのかたちで、理系と文系の橋渡しの役目を果たすことができれば、と思って、リベラルアーツセンターに参加しました。余談ですが、私もまもなく62歳になりますから、社会への恩返しをしたい、これからの世代を支えていく人達を育てるお手伝いをしたいという思いもあります。

桑子：授業がすでにスタートしましたね。ご感想は？

池上：文系の学生には、積極的に文系を選んだ訳じゃなく、数学ができないから、消極的に文系の道を選んだ、という人間が少なくありません。東工大で学生たちに直に接して感じたのは、みんな理系を積極的に選んでいること、そのうえで、さらに文系科目も得意な学生と、文系科目がまったくダメな学生とがいて、両者の格差がものすごくあること、それが印象的でした。

上田：授業開始1カ月で、もう東工大の学生の特徴がわかっちゃったんですか（笑）

池上：いえいえ、授業をやりながらの学生とのやりとりでの第一印象です。このあとレポートをかつちり書かせたら、また愕然とするのかも知れませんが（笑）。理系の学生に教養を授ける授業を実践されてきた桑子先生からご覧になると、東工大の学生はいかがですか？

桑子：まず、私の講義の内容について触れておきます。哲学や倫理学に加えて「社会的合意形成の技法」を教えてください。

池上：社会的合意形成の技法……、いったい何を教えているんですか？

桑子：地域社会などのさまざまなプロジェクトが実際に進むにあたって、地域社会や利害関係者のあいだで、どのように合意形成が進むのかを実践的に学ぶ授業です。

「社会的合意形成の技法」の授業はそれほど古いものではなく、私が東工大へ来てスタートし、学生諸君と考えながら進めてきたものです。例えばダム建設や森林の保全をテーマに地域社会へ足を運んで、いろいろな人と話をしながら、どうやって合意を形成するかを体験します。こういった問題意識に目覚め、新しい分野を創造し、続けてこられたのは、東工大と学生諸君あってのことで、ありがたいと思っています。いきいきとやれています。

ただ、この社会的合意形成の技法の授業のように、少人数でディスカッションを行う方の講義はそれほど多くないのが残念ですね。

池上：学生たちの反応はいかがですか？

理系の大学に女子が少ない、が日本をダメにする

桑子：東工大の学生は理系の知識と技術を持っているので、例えば、こうしたプロジェクトに参加している人たちに有用な情報共有システムなどはあっという間に構築してしまうんですね。ただ、その一方で、実際の合意形成には不可欠の生身のコミュニケーション能力や、あるいは文章力などが低いんです。私がそう断じるのではなく、学生自身が、「ぼくたち、このあたりが弱いんです」と告白します。

池上：なぜコミュニケーション能力が身についてないんでしょう？

桑子：東工大では女子学生の割合が約10%です。とにかく女子学生が極端に少ない。このため、そもそも男女間のコミュニケーション方法がわからないという悩みを多くの男子学生たちが抱えています（会場笑）。

いやいや皆さん、笑いごとではないんですよ。大学時代に男女間のコミュニケーションのいろはを学ぶことはとっても重要なことです。ところが、ですね、東工大には、男子校出身者が多いんです。

このため、大学でも女子学生とコミュニケーションがとれないと、青春時代ずっと女性と縁のないキャンパスライフを送り続けることになりかねない。生涯独身率が高い時代、東工大の学生は素晴らしい遺伝子をお持ちなのにそれを残せないのは実に問題ではないですか、と学生にまじめに話しています。

上田：うーん、わかります。僕も男子校から大学は理科系に進んだので、東工大の男子学生たちの気持ちは痛いほどよくわかります。中高6年間の男子校文化からのリハビリに10年くらい掛かりましたからね。もし、大学3年生時に文系に転身しなかったら、いったいどうなっていたことか。

実は男子だけの空間で女子とコミュニケーションをとらないでいると、「発想」の貧困化も招きます。つまり、女性の気持ち、フェミニンな発想が理解できなくなってしまう。世の中の半分は女性ですし、市場も教育もむしろ女性が主導権を握っている。

池上：東工大に限らず、日本の理系大学では女子の比率が圧倒的に低いですね。その結果、理系の男子学生たちが「女のきもち」がわからないまま社会に出る、というのは実は非常に危ない——。そんなお話を、桑子先生、上田先生にご指摘いただきました。

理系男子だけだと「枠の中の正しい答えを探す」ことだけに、傾注してしまい、枠組みから自由に発想したり、他者とのコミュニケーションを積極的に行う、ということができにくくなったりする。まさに「男女交際」は、理系男子にとって必要欠くべからずの「教養」なのだ、ということがわかりました。

上田：ええ。その点を桑子先生にいま指摘していただいてすごくよかったと思います。で、いまの話とも関連するのですが、僕は、これからの教養には4つのCが必要だと思っています。

第1のCは、コミュニケーションです。日本の学生は、頭の中ではいろいろと考えてはいるが、なかなかそれを言いません。「ぼくは意見を持っていますが、言わないだけです」って（笑）しかし、そもそも口に出さない考えは意見とは呼ばないわけです。情報は発していかないと、他をインスパイアできません。つまり、コミュニケーションからすべてのアクションは起こるのです。何かを作る理系の人間にこそ、コミュニケーション力は必要となり得ます。

第2のCはコミットメントです。状況に関わっていくことですね。「僕は状況の分析はできるけど、その現状にはかかわりません」といった批評家的なスタンスはもはやダメでしょう。いかにすばらしい分析ができてコミットメントできなければその分析能力を教養とは呼ばれません。

何かを生み出すことが現代の「教養」

上田：第3のCは、クリエイション。なにかを生み出していく能力です。「デカンショ」的な大正昭和の教養主義は、ただ知識を吸収するだけの教養でした。すべてのことは古典の中にあった、というスタンスだったからですね。でも、今は情報をため込むだけでは教養ではないのです。あくまで次に何を生み出せるかが問われます。

それから第4のCが、先ほどから触れている「女性」性とも大きく関わる、ケアです。ケアについては、東大教授の川本隆史さんの著書『哲学塾』（岩波書店）から、ある事例を紹介したいと思います。ハーバード大学にかつてローレンス・コールバーグという心理学者がいました。彼は子どもたちの知識の発達を6段階に分けて評価するために実験をしています。

まず、物語を聞かせます。こんな内容です。

「ハインツという男がいます。ハインツの奥さんはガンで死にかかっています。お医者さんは最近売り出された特効薬を使うしかないと言っています。その薬の開発者は、開発費の10倍の値段を付けているため、薬はとても高価です。ハインツは募金を集めましたが、値段の半分しか集められませんでした。ハインツは開発者に交渉しましたが、色よい返事をもらえませんでした。ある日ハインツは、愛する妻のため、薬のある倉庫に忍び込み、盗み出しました」

上田： さあ、この行為をどう考えるか。子どもたちに答えさせます。

コールバーグは、男の子はより高い段階で判断を下してスコアが高く、女の子は判断が下せずに、スコアが低いという結論を導き出しました。中には「開発者の所有権とハインツの奥さんの生存権のどちらが高いか」という問題だから、そこを決定すれば正しい答えが出る」と大人顔負けの論理を導きだす11歳の男の子まで現れます。

ところが、この結果に反発したのが、キャロル・ギリガンです。この物語で設定した問題は、現実起きたとしたら算数のように一つの答えで解けはしないのだから、「答えは出せなくて当然」というわけです。

ちなみにコールバーグの実験ではスコアが低いとみなされてしまう、11歳の女の子の答えはこういうものです。

「製薬会社をちゃんと説得する方法はないものだろうか、もっとお金を集めることはできないのか。奥さんのために盗みを働いた夫が捕まったら、自責の念にさいなまれた奥さんは病気が重くなってしまわないか……」

11歳の女の子はこういったプロセスを考えていて、結論が出せませんでした。コールバーグのやりかたではこの11歳の女の子の発達段階は低いと評価されてしまいます。

でも、ここで11歳の女の子が思いを巡らせているのは、ガンで死にかかっている奥さんを救おうとしているハインツのとった方法が正しかったか間違っていたか、についてではありません。ハインツの奥さんが助かるにはどうしたらいいだろうか、という具体的な状況に対するコミットメントのあり方であり、結果としてなるべく誰もが傷つかないで、最良の結果＝奥さんが助かる道筋を円滑に見つけてこうとすること、つまりケアの仕方なのです。

そこまで思いを巡らせたがゆえに安易に答えを出せなかった11歳の女の子を「発達段階が低い」と断ずるのは間違っているのではないか？ それがギリガンの指摘でした。

「正しい答え」にこだわるか、「現実的な解」を探すのか

池上：男の子が物語の枠組みの中での「正しい答え」を見つけるのがうまかった。けれども、女の子は「正しいか間違っているか」よりも、現実にごうした問題が起きたときにどうすれば誰も傷つかずにうまくいくかまでをも考え抜こうとしていた。実社会で、どちらが有効なのか、という問いにつながりますね。

上田：はい、その通りです。僕も大学時代、女性とちゃんと付き合っていなかったころは、ひたすら「正解を決めればいい」と思っていました。男子はややもすると正解を求めることが自己目的化する。だから「正しい」「間違っている」を決めたがって、そのあとは誰かに任せたる。でも、女性と付き合うようになれば、現実社会では正解を決めているだけではダメで、コミットして、その問題に飛び込んでいく必要が多々あることに気がきます。

そんな「現実」を早めに知るためにも、東工大の男子たちはもっともっと女の子と付き合うべきだなあ、と思うのです（笑）。

池上：まさにさきほどの「決められた枠組みの中では正答は出せる」というのは、前提条件が変わってしまうと役に立たない能力に陥る、という話と同じですね。現実には、たとえば、ガンの特効薬の所有権かガンに罹った奥さんの生存権かの二択問題ではない――。

上田：そうです。もちろん男女内でも個人差がありますから、男はこう、女はこう、と決めつけるのも危険なのですが、与えられた問題の解だけを考えがちな「男性的」思考が行き詰まりをみせていて、その問題の外側までをも想定して、新しい解を自由に創造していく「女性的」思考のありかたが今こそ求められていると言えそうですね。

桑子：リベラルアーツのリベラル=自由、とはまさにそういうことです。与えられた問題の解を出すのではなく、自ら自由に問題を設定し、新しい解を探していく。

そもそもリベラルアーツとはギリシャで生まれた概念です。古代ギリシャ人は、自由人としての人間こそが、自分の精神を高めることができると考えていました。この場合の自由とは、「労働からの自由」を指します。背景には奴隷制度がありました。ギリシャ語で奴隷のことをドゥーロスと言いますが、これが転じてドゥレアとなると「労働」を意味します。「労働」に縛られることがすなわち奴隷状態。要するに「労働」とは、自由になろうとする人間を縛るものなんだ、というのがギリシャ人の考えでした。

「労働からの解放」がギリシャの経済危機を招いた？

池上：だから今もギリシャ人は働かなくて、今回のような経済危機を招いてしまうんでしょうか（笑）。

桑子：いや、笑い事じゃなくて、まさにそうなんです。ギリシャ人にとって、「労働」からの解放はとっても重要な課題でしたから。

そんなギリシャの「労働」と「自由」の考え方が、ヨーロッパ全体に伝播すると、今度はキリスト教的な信仰と理性の問題に発展し、教会というシステムから人間を解放するにはどうするかという話になっていきます。つまり、人間は、労働だの宗教だのという自ら設定した「枠組み」から常に自由になろうともがいてきた。では、現代の私たちは、何から自由になるべきなのでしょう？

池上：何から、ですか？

桑子：先日、福島県の南相馬市へ行ってきました。ご存知のように、南相馬市は東電原発事故の現場から近くて放射線の線量が高く、子どもが自由に外で遊べない状態が続いていました。そこで遊び場として体育館が開放さ

れていたのですが、体育館に段ボール箱を積み上げて、そこで暴れていいよ、という『みんな共和国』というものが作られているのを見ました。その入り口にはこうありました。

「自分の責任で、自由に遊ぶ」

ここでは何をしてもいいけれども、ケガをしようがケンカをしようが自分たちで解決しなさいよ、という、大人からのメッセージですね。では、この場合の「自由と責任」とは何か。この場合の自由の「枠組み」とは何か？ その「枠組み」を超えるとはどういうことか？ 現代における自由とは、つきつめれば教養とは、たとえばこうしたことを考え抜くことだと思います。

東工大生の「サラリーマン根性」ぶりにびっくり

上田：今の桑子先生の「枠組み」論にひきつけて、今度は東工大の学生たちの話をいたします。僕が東工大に来てショックだったこと、それは、東工大の学生たちが「頭がいいけど『世間』に弱い」ということでした。まあ、東工大生に限った話ではないのでしょうか。

池上：「頭がいいけれど世間に弱い」。いったいどういうことでしょうか？

上田：僕はこの10年間ほど毎年講義で学生たちに同じ質問をしてきました。

まず日本の企業の閉塞的な状況を描いたビデオを見せた後で、こんな質問をします。

「あなたはメーカーに勤務し、東南アジアの工場で働くことになりました。そこでは有害物質を排出し、公害を引き起こしています。赴任早々、それに気づいたあなたは、上司に報告しましたが、効率重視の上司は『そうはいつでも』と、改善しようとしません。さて、あなたはどうしますか？」

次にこの問いに対する答えを3つ用意します。

- (1) 実名で告発する。
- (2) 匿名で告発する。
- (3) 何もしない。

で、学生に選ばせる。
するとどうなるか。最悪の結果だったのが2006年です。

200人の学生のうち、(1)が数人、(2)が十数人、残り180人が(3)でした。

なんと9割が知らぬふりをするんです。答えたのはまだ会社に入っているわけでもない、会社に忠誠を誓っているわけでもない、学生たちなのです。これがはたして自由な社会で出てくる比率でしょうか？

いまの学生たちはインターネットなどを通じて実にいろいろなことを知っています。しかし、真実を自由に話せない社会は豊かな社会とは言えないでしょう。なぜ、9割もの学生が「何もしない」を選ぶのか。愕然としました。

池上：うーむ、びっくりですね。その後、学生たちの回答の比率は変わったのでしょうか？

上田：ちょっとずつ告発派が増えていたのですが、一昨年でも(1)と(2)を合わせても全体の2割にはいきませんでした。ところが、昨年の震災と原発の事故の後に聞いてみたら、何と、(1)が30人、(2)が100人、(3)が70人と、告発派が過半数の130人になったのです。

池上：震災と原発事故で多少なりとも学習効果があったのかもしれないね。

上田：はい。悪いことを隠蔽してはならない、正しい、ということを表に出していかななくてはならない。教養がもたらす「自由」が体现される社会とはそういうことが当たり前の社会だと思います。

上田：日本がその意味で教養のある社会、自由な社会足り得るかどうか。もしかすると、今が潮目ではないかと思います。新しい教養教育を考えると、自分の意見を自由に発信していく「ある種の力」も同時に学生たちには与えていかないといけないでしょう。知ってはいるけど発言しない、という「悪しき教養主義」に陥ってしまっただけだと思ってしまうのです。

池上：実は私も上田先生と似た経験をしました。先日、東工大の「現代社会の歩き方」という講義で、あのオリンパス巨額不正事件について触れたのです。外国から招かれた社長が、自社の不正に気づいた。さてどうするか、という話ですね。

「この話をどう思う？」と聞くと、ある学生は「こういうことに巻き込まれないようにしようと思います」と答えました。

巻き込まれないように。——この言葉は、好意的に解釈をすれば「不正に加担しないようにしていきたい」とも受け取れます。しかし「事を荒立てると大変だから、見て見ぬふりをしたい」とも聞こえます。

確かに嫌だとは思いますが、自分が社長になったときに会社の過去の不正に気づくというのは。しかし、そういうときにどんな態度をとるかによって、その人の「生き方」そのものが問われますよね。

教養とは「知識」じゃない。現実にコミットメントすること

桑子：いま、池上さんが「生き方」とおっしゃいました。リベラルアーツセンターの理念は、まさに人の「生き方」とも深く関わります。人間性と社会性。これが人間を構成する2つの柱です。

大学教育の中で、文科系はこれまで、人文科学と社会科学とに分かれていましたが、このリベラルアーツセンターでは、そういった人文科学系、社会科学系という学問上の区別を超えて、人間性と社会性をどう高め、養うかに取り組んでいきたいと思っているのです。ですからリベラルアーツセンターの柱は、人文科学と社会科学といった「分野」ではなく、人間性と社会性、の2本なのです。

桑子：それから上田さんからコミットメントという言葉が出ました。つまり社会性を持つ、社会になんらかのかたちで参加する、ということです。

かつて日本の行政は、一般市民の政治参加について「巻き込む」という表現をしました。英語でいうとインヴォルヴメント。主体はあくまで行政サイドです。ところが、この言い回しが変わってきました。インヴォルヴメントからパーティシペーション、つまり参加を求めるようになってきて、最近では、エンゲージメントを求めています。つまり、市民が自らの責任で積極的に行政に関わることを意味しています。

エンゲージメントは、フランス語で言うとアンガージュマンですが、これはまさにサルトルが言っていたことです。巻き込まれるのではなく、市民が現実の社会、現実の政治に自らの意志で関わっていくことが求められている。それが今です。

池上：なるほど、教養を得るとは究極的な自由を獲得することであり、それはすなわち自らの意志で社会に関わっていく、ということにつながるわけですね。従来の「教養」のイメージとは違います。大正や昭和の時代に「教養がある」というのは、たくさん本を読んでものをよく知っている人のことを指しましたが、今の時代は、コミットメントしたり、エンゲージメントしたり、さまざまな実践能力も兼ね備えていないと、教養がある、とは言えないわけですね。

上田：その通りです。さきほどちょっと触れましたが、僕は、こんなに豊かな社会なのにわれわれ日本人の発想も行動も置かれている立場も全然自由でないことが大きな問題だと思うのです。

さきほど、永井道雄さんの話が出ましたね。東工大で教授を13年間務めて、朝日新聞社へ移り、その後文部大臣を務めた方です。伊賀学長も講義を聴いたことがあるそうですが、ものすごく面白い、弁舌流れるような講義だったそうですよ。

その永井さんが、大学を辞める直前に『大学の可能性』（中央公論社）という本を書いています。大学に何を望んでいるかを記したのですが、今も通じるものが多々あります。

教養課程は、専門課程より難しいのだ

上田：ポイントは2つ。第1に、教師も学生も自由に研究し、教育し、学習できる場であることを望む、ということ。第2に、「人間らしい人間」になることを切望する、ということ。永井さんは主張します。人間らしいということの意味は「人間は他の何ものかのための、道具や手段であってはならない」ことだと。

昨日この本を読み返していて、そうか「人間らしい」人間の追求というところが肝なのだとハタと膝を打ちました。それは永井さんの時代から変わらない、むしろ常に最先端の問いだと思います。

過去20年、日本の大学は、これまで述べてきたように、授業内容の専門化を進めて「できる人」ばかりを作ってきました。これはつまり、人間を「道具」や「手段」としよう、ということです。逆にいえば、「いい道具として生きなければ評価されない」ようになってしまったのです。

でも、時代はむしろ枠外の自由な「教養」を求め始めています。いくら「できる人=よい道具」となっても、枠が崩れたら、その道具自体が役立たずになってしまうかもしれないのですから。

上田：そんな時代に求められる「教養」とは、昭和や大正の時代のようにトリビアルな知識をたくさん持っていること、ではありません。課題を探し出し、考えていくプロセス。そのプロセスを血肉化していることが、現代の「教養」なのです。

池上：まさに、そんなプロセスを今、この会場でやっているわけですよね。教養ならぬ強要はしていないつもりですが。

(会場笑)

上田：もうひとつ、永井さんは非常に鋭い指摘をしています。

教師にとって、教養課程を教えることは専門課程を教えることよりも難しいのだと。残念ながら、現在の日本の大学においては、専門課程のほうが教養課程よりも重視されていますから、教養課程を教える先生も、僕の経験でもなんとなく専門課程の先生よりも下に見られている傾向があるような気がします。でも、永井さんはずいぶん昔に指摘しているんですね、実は専門課程よりも教養課程のほうが教えるのが難しいのだ、と。

前進すること、それこそが教養なのだ

桑子：今の上田先生の話で、思い出したことがあります。さきほどちょっと触れたように、東工大に社会理工学研究科という大学院ができたとき、私は工学部の教養課程の助教授から社会理工学研究科の大学院の教授になったのですが、そのときに事務方にこう言われました。

「二階級特進ですね」

そう言われて初めて、私は日本の教育制度の中で、一般教養担当の先生がどう見られていたかを知りました。

桑子：単に助教授が教授になったのなら「二階級」特進ではありません。一階級上がっただけです。ではもう一階級とは何か。そう、学部の教養課程から大学院へ移ったことです。つまり、工学部で教養課程の文系科目を教

えるということが、大学内でどう見られていたか、ということです。私はそれまで、東工大という素晴らしい学校に呼んでもらって前の大学の文学部哲学科から移ってレベルアップしたと思っていたので、正直、驚きました。

上田：永井さんの場合は、京大文学部社会学の助教授からわざわざ東工大の教養課程へ移りました。今の話だと、「一階級」ダウンです。でも、永井さんは大学教育において教養こそが大切だと思われていて、下がったという意識はなかったはずですよ。

永井さんは、専門を掘り下げること、体系的に学ぶことも、どちらも「教養」なんだと言っています。結局、教養とは「前進していく」ことなんですね。

上田：それから、「場が大切だ」とも言っています。教養は、枠にはまったカリキュラムを作り、誰が教えてもいいようにマニュアル化したとたんに死んでしまいます。そうではなくて、社会との関わりの中で、問題意識が鮮鋭な人たちが集まり、熱く考え、議論する場があれば、そこで現代的な教養が育めるのだと思います。

池上：話すのが好きで上手な人が二人いると話が全くまとまらないのですが、残念なことに、そろそろ時間のようです。

でも、御聴きいただいた方々、どうですか、従来の「教養」のイメージが大きく変わったのではないのでしょうか。

教養、というと、とにかくやたら本をたくさん読んでいて、実社会の役には立たない知識を集めている、というイメージがあったかもしれません。でも、桑子先生、上田先生のお話では、教養というのはそういうものではない。

枠組みから自由になり、積極的に社会に関わる

池上：教養＝リベラルアーツの、リベラルとは、さまざまな枠組みから自由になることである。ではどんな枠組みからどう自由になることなのか。まず、それを考えること自体が教養の第一歩である、ということ。これまでの常識が通じない、変化の激しい今のような時代においては、教養こそが次の解を出すための実践的な道具になり得る、ということ。であるがゆえに、教養を身につけたからには、傍観してはだめで、社会に対して、積極的にコミットメントする、参加する、関わっていかねければ、真の教養人とはいえない、ということ。

桑子・上田 その通りですね。

池上：桑子先生はよく「教養とは人間の根っこの部分である」とおっしゃいます。まさに人間としての根っこの部分をどうつくっていくのか。そのための場を、リベラルアーツセンターは提供していきたい、と思っております。とまあ、無理矢理まとめましたが、おっと忘れてはいけない、専門バカにならないために、とりわけ東工大生の男子諸兄におかれては、「男女のコミュニケーションもとっても大事よ」ということですね。

桑子・上田 いちばん大事な部分です。